特集2◎釣り人のサイエンス―

02

『イワナをもっと増やしたい！』はこんな少年時代から生まれた。
15歳のサイエンティスト

寄稿
中村智幸 氏
独立行政法人水産総合研究センター・増養殖研究所内水面研究部
『イワナをもっと増やしたい！』著者

●イワナ・ヤマメの人工産卵場の造成技術を日本で初めて確立したのは、独法水産総合研究センターの中村智幸氏だ。小誌での連載を単行本『イワナをもっと増やしたい！』にまとめて上梓して以来、渓流魚の人工産卵場作りは全国各地で大流行だ。しかし本来、人工産卵場なぞ作らなくても、勝手に魚が産卵できる自然環境が守られている状態がいちばんいい。中村さんは著書でも「人工産卵場はあくまで次善の策です」と繰り返し強調している。昨年9月の「信濃大町テンカラミーティング&講習会」（長野県高瀬川）というイベントでも中村さんは「人工産卵場に関する情報提供の広がりは、これくらいでいいと思います。魚を増やす方法は他にもたくさんあります」と言っていた。

●中村さんはその時、話の流れで「つい最近になって、自然産卵と稚魚放流、発眼卵放流で、じつはおどろくほど魚の生残率に違いがあることが分かりました」と口にした。より効果的で野生に近い増殖方法も分かり始めたとのこと。改めて取材のお願いをした。

●今年2月、日光へ中村さんを訪ねて、その時点までの研究成果の途中経過をうかがった。おどろく話の連続だった。これまでの渓流魚の増殖方法の常識が、ひっくり返されてしまうかもしれない。

●編集部では今号に掲載するべく記事を構成した。ゲラにまとめて入稿寸前まで行ったところで、中村さんから待ったがかかった。研究はまだ途中経過であるから、雑誌で公表するのはもう少し待ってほしいという理由だった。

●事前に小社HPで告知していたこともあり多くの読者に興味を持ってもらえていた内容だが、編集部の勇み足という結果になった。期待してくださっていた読者の皆さまにはたいへん申しわけありません。来年にはどこよりも早くどこよりもくわしくご紹介することを、今度こそお約束します。

●さて本誌編集部は転んでもただでは起きない。かえって恐縮している中村さんの気持ちにつけ込んで、代わりに、とっておきのお蔵出し原稿はないですかと要求。親切な中村さんが提供してくださったのが今回の原稿だ。

●なんと33年前、当時中学生だった15歳の中村智幸少年が投稿して、地域の釣り雑誌に掲載された2篇のエッセイである。渓流魚の研究者を志した中村さんの科学する心が、少年時代のこの頃からにじみ出ているのが分かる。あまりにみずみずしい。

●あなたの身の周りにこんな15歳の科学者はいませんか。（堀内）

去年の高瀬川での講習会には、地元漁協の組合員が数10人もやってきて、人工産卵場の造成をいっしょに行った。昔のように魚があふれる川に戻したいという気持ちがあふれていた。作業の先頭に立って誰よりも汗を流していたのは中村さんだった。「やる気がある漁協さんには結果はどうあれお手伝いしたいんです。渓流域では漁協も行政も含めて、いろんな価値観が出てきてアイデアが実際に試されてもいる。各県の水産試験場にも渓流魚関係の優秀な研究者がたくさんいらっしゃいます。川にヤマメ・イワナを増やそう、いい釣り場を作ろうと現場で一生懸命に頑張っています」（中村）。今の状況に至るまでに、中村さんのこれまでの研究と、その著書『イワナをもっと増やしたい！』が果たしてきた役割は大きい。